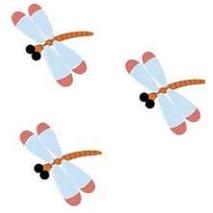




夏

昆虫の世界は大変にぎやかになってきます。



◆初夏…………… (しょか=夏になったばかりのころ、夏の入り口です)

サラサヤンマ、ハラビロトンボ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、ショウジョウトンボ、モノサシトンボなどのトンボ類が現れます。

ハラビロトンボ(オス)



4月～10月、小型のトンボです。オスとメスで色と模様(もよう)が違います。オスは成熟(せいじゅく=完全な成虫になること)途中の一時期、黒に近い青色になり、やがて普通の青色になります。水生植物の多い池や湿地で見られます。

ハラビロトンボ(メス)



体の色は少し暗い黄色地で、尾(腹)部には黒いまだら模様があります。

オオシオカラトンボ(オス)



5月～11月、中型。大きさはシオカラトンボとほとんど変わりません。違いは尾(腹)部が太いこと、はねの根元が黒いこと、色が少し濃いことです。オスとメスの色や模様(もよう)の変化はシオカラトンボと同じで、成熟途中のオスについても同じです。

シオカラトンボ(オス)



4月～11月、中型のトンボを代表する種類です。オスとメスで色と模様(もよう)に違いがあります。オスは白っぽい青色で、成熟途中のオスはメスと同じ色や模様をしています。オスの色の白っぽい部分を塩に見立てた名前です。

シオカラトンボ(メス)



体の色は少し暗い黄色地で、尾(腹)部には黒いしま模様があります。色と模様(もよう)からムギワラトンボという別名があります。

オオシオカラトンボ(メス)



体の色は少し暗い黄色地で、尾(腹部)の先から半分くらいは黒くなっています。ため池や水田のまわりの棒の先などに、よくとまっています。

サラサヤンマ



5月～7月、日本にいるヤンマの中では最も小型です。湿地(しっち)で発生しますが、いる場所は限られています。ならやまではよく見かけます。

奈良県では希少種(きしょうしゅ)に指定されています。

ショウジョウトンボ (オス)



4月～11月、トンボとしては小型。オスとメスで色が違い、オスは複眼(ふくがん)も含めて全身が真っ赤で、メスの色はオレンジ色です。ショウジョウ(猩々)というのは、中国の想像上の動物で、毛が真っ赤な怪物(かいぶつ)のことです。

モノサシトンボ



4月～10月、中型のイトトンボ。名前のモノサシは、腹部(尾)の模様(もよう)が、物さしの目盛り(めもり)のようなどころからついたものです。



クワの木には、クワコ(ガ)の幼虫が見られます。

クワコ (幼虫)



クワコ (まゆ)



クワコ (成虫)



クワコ(中型のガ)は、カイコの祖先に当たる昆虫です。遠い昔の中国で、クワコを改良(かいりょう)してカイコが作られたといわれています。今でもクワコとカイコの間では、繁殖(はんしょく)ができ子孫を作れるそうです。

クワコは幼虫・成虫ともにカイコの姿によく似ています。まゆも形は似ていますが殻(から)はうすいです。クワコは飛べますが、カイコガは飛べません。



「昆虫が持っている驚きの能力」

トンボの目玉のことはしていますね。昆虫の眼は、数万個のレンズからなる複眼ですが、視力はたったの0.01しかありません。それにもかかわらず、トンボは大空を自由自在に飛び回り、小さな虫をもの見事にキャッチします。ミツバチも、小さなはねを1秒間に250回という驚きの速さで動かしながら、決して周囲のなかまや障害物にぶつかることはありません

カノコガ、ミズイロオナガシジミ、シロコブゾウムシ、マメコガネ、キボシカミキリ、クワカミキリなどが現れます。

カノコガ



6月～9月、30～37mm。昼間(ひるま)に飛ぶガです。カノコという名前は、はねが白い斑点(はんでん)の鹿(か)の子模様(もよう)になっていることによります。幼虫の食べ物は、シロツメクサ、ギシギシ、タンポポなどです。

ミズイロオナガシジミ



後ろばねに細い尾のような部分を持っています。コナラやクヌギの多い雑木林(ぞうきばやし)で見られます、幼虫の食べ物はクヌギやコナラの葉です。

シロコブゾウムシ



ハギやニセアカシアの葉によくとまっていますが、食べ物はそのほかにクズ、フジなどがあります。名前は、前ばねに白いこぶがあるためです。

マメコガネ



5月～10月、小型のコガネムシです。マメ科植物のほかに、いろいろな植物の葉を食べ、農作物(のうさくぶつ)の害虫として知られています。この昆虫は、かつて日本からアメリカへ輸出品にまぎれて渡り、アメリカで広まって農作物の大害虫になっています。

キボシカミキリ



5月～11月、中型のカミキリムシです。クワやイチジクの木にきます。幼虫もこれらの木を食べて生育します。

クワカミキリ



5月～8月、大型のカミキリムシです。クワやイチジクの木の新枝を食べます。幼虫はいろいろな広葉樹(こうようじゅ)の木の中で生育します。



◆真夏が近づくころ …………… (真夏にはなっていませんが、真夏が近づいたころです)

カブトムシ、ノコギリクワガタ、ミヤマクワガタ、コクワガタなどの大物スターが現れます。クヌギやコナラの樹液(じゅえき)の出ているところには、そのほかにカナブン、オオスズメバチ、コムラサキ、ゴマダラチョウ、サトキマダラヒカゲなども集まります。

カブトムシ(オス)



6月～9月、大きいがコガネムシ類です。幼虫は堆肥(たいひ)の中などで育ち、成虫は夜行性で、昼間(ひるま)は落ち葉の下にもぐっています。メスには角(つの)がありません。

ノコギリクワガタ(オス)



6月～9月、大型のクワガタムシです。メスには大あご(はさみのような部分)がありません。ミヤマクワガタより早く現れます。

ミヤマクワガタ(オス)



6月～9月、大型のクワガタムシです。メスには大あごがありません。名前にミヤマ(深山=山奥)とついていますが、関西地方では里山にいる昆虫です。

コクワガタ(オス)



5月～9月、中・小型のクワガタムシです。小さいオスの大あごには、歯がないものがあります。メスには大あごがありません。成虫で越冬し、数年生きるようです。

カナブン



6月～8月、コガネムシとしては、かなり大型です。昼行性(ちゅうこうせい=昼間に活動)のため、よく目につきます。飛ぶときは後ろ**ばね**(下の**はね**)だけで飛びます。

オオスズメバチ



5月～11月、世界最大級のハチで、大集団で生活します。巣は地中や木の洞(ほら)など。花にもきますが、クヌギなどの樹液にもきます。次の代の女王バチだけが成虫で越冬します。

コムラサキ



5月～10月、30～42mm。オスの**はね**のおもては、むらさき色にかがやきます。クヌギ・ヤナギなどの樹液(じゅえき)にきます。幼虫はヤナギで育ちます。

ゴマダラチョウ



5月～9月、35～50mm。かなり大型です。クヌギなどの樹液のほか、落ちた果物の汁を吸います。幼虫はエノキの葉を食べます。

サトキマダラヒカゲ



5月～9月、26～39mm。クヌギなどの樹液には、たいいていきています。幼虫はササやタケ類の葉を食べます。

花にはイチモンジセセリ、キマダラセセリなどもきます。草むらでは、キリギリスが鳴き出します。地面の片隅(かたすみ)では、センチコガネも活躍(かつやく)しています。

イチモンジセセリ



5月～11月、小型のセセリチョウ。セセリチョウ類の大方は小型で地味です。秋には数を増し、群(むれ)で100km 程度の移動をすることが知られています。

キマダラセセリ



6月～9月、小型。セセリチョウ類は大方が濃い茶色ですが、このチョウは名前のおり黄色みが強いので、わかりやすいです。幼虫はササ・タケ類、イネ科の植物を食べます。

キリギリス



6月～10月。草むらにいて「ギース・チョン」と鳴きます。今までキリギリスとされていた昆虫は、よく似た2種類の昆虫であることがわかり、主に東日本にいるものをヒガシキリギリス、西のものをニシキリギリスに分けられました。しかし、両方の違いはわずかで、わかりにくいです。

奈良県には両方がいて、まじりあっていますので、両方を区別しないで説明しています。

センチコガネ



3月～12月、14～20mm。けものの糞(ふん)や腐敗(ふはい)した肉を食べます。同じ種類でも色の違(ちが)いは大きく、赤銅(赤銅)色から濃(こ)い藍(あい)色まであります。

このころになると、ギンヤンマ、ウチワヤンマ、コシアキトンボ、チョウトンボ、ウスバキトンボや、ときにはオニヤンマなども空中を飛び回るようになります。

ギンヤンマ (メス)



4月～11月、大型。尾(腹部)のつけ根は、オスは水色、メスは緑色です。昔から子供たちに人気のあるヤンマです。写真は、メスが産卵しているところです。

ウチワヤンマ



5月～9月、大型。名前にヤンマと付いていますが、サナエトンボ類です。名前は尾の先の突き出た部分をうちわに見立てたもので、水平に止まります。(サナエトンボ類は、みな同じ)

コシアキトンボ (オス)



5月～10月、中型。尾のつけ根がオスは白、メスはうす黄色です。空を飛ぶのを見上げますと、腰(こし)の部分にすき間があるように見えるので、「コシアキ」という名がついています。

チョウトンボ



5月～9月、やや小型。はねは濃いむらさき色、後ろばねの幅(はば)が広いです。チョウのようにひらひらと独特(どくとく)の飛び方をするので、この名前がついています。とまっていることは少なく、常に空中を飛んでいるような感じです。

ウスバキトンボ



4月～11月、中型。南方系(なんぼうけい)のトンボです。沖縄など南の島々で発生し、世代交代(せだいこうたい)を重ねて、北の方へやってきます。晩秋(ばんしゅう=秋の終わりころ)には死んでしまい、次の代は育ちません。毎年、同じ流れをくり返しています。

オニヤンマ



6月～12月、日本のトンボの中で最も大型です。山道などの一定の場所を、行きつ戻(もと)りつします。幼虫は、小さな流れや水田などの水路で育ちます。トンボ類は空中でひらりと向きを変えるので、これを「とんぼ返り」と呼び、物事の例(たと)えに用いたりします。

セミもニイニイゼミが真っ先に、続いてクマゼミ、アブラゼミ、ヒグラシが鳴き始めます。ときにはミンミンゼミも鳴いています。

ニイニイゼミ



6月～9月、32～39mm。小型。ならやまの夏のセミでは、真っ先に出てきます。6月の終わりころから鳴き出し、鳴き声は「チー」という連続音(れんぞくおん)で、声も大きくありません。完全な保護色(まわりと同じような色)で、木の幹に止まっていると見つけにくいです。

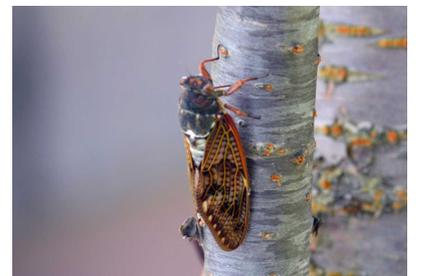


クマゼミ



7月～9月、63～70mm。ニイニイゼミに続いて鳴き出します。九州以北では最大のセミです。鳴き声は「シャー・シャー」と聞こえます。午前中に大合唱(だいがっしょう)があり、午後にはびたりとやみます。南方系(なんぼうけい)のセミです。以前は西日本のセミでしたが、最近(さい近)は関東地方まで広がっています。

アブラゼミ



7月～9月、55～60mm。クマゼミに続いて鳴き出します。最も普通にいるセミです。鳴き声は、油の煮(に)えたぎるような音で、そこからアブラゼミという名前になったといわれています。幼虫は地中で6年間(ご)すし、7年目に地上に現れます。地上での生命(いのち)は、2週間(ふたしゅうかん)くらいといわれています。



ヒグラシ



7月～9月、39～48mm。中型のセミです。関西の場合、少し山手のうす暗い林の中にいます。カナカナゼミとも呼ばれ、鳴き声が「カナカナ」と聞こえるからとのこと。朝と夕方や、くもりのときによく鳴きます。

ヒグラシの抜け殻(参考)



抜(ぬ)け殻(がら)も小ぶりです。ならやまの林の中には、たくさんついています。

ミンミンゼミ



7月～9月、57～63mm。ならやまでは、ときどき鳴き声が聞こえます。鳴き声は「ミーン・ミンミンミー」と聞こえます。

関東地方では町の中でも鳴いていますが、関西地方では低山地のセミです。

◆真夏…………… (夏の真っ盛りのころです)

タマムシ、ウバタマムシ、ベッコウクモバチ、オオモンクロクモバチ、セグロアシナガバチ、シオヤアブ、アオスジアゲハ、ヒカゲチョウ、ツクツクボウシなどが活躍(かつやく)します。

タマムシ



6月～9月、24～40mm。よく知られた美しい昆虫です。エノキの木の上を飛んでいるのをよく見かけます。法隆寺(ほうりゅうじ)の「玉虫の厨子(たまむしのずし)」は有名です。ヤマトタマムシの別名があります。幼虫はエノキ、サクラなどの弱った木や枯れ木で育ちます。

ウバタマムシ



6月～10月、24～49mm。大きさはタマムシと同じくらいですが、体の色は地味で、幼虫はマツの弱った木や枯木で育ちます。大きさがタマムシとほぼ同じなので、タマムシのメスだと思われることがあります。

ベッコウクモバチ



4月～10月、15～27mm。クモを狩(か)るハチとしてよく知られています。後(ご)ずさり(さ)りで大きなクモを引いて行きます。クモは幼虫の餌(えさ)で、毒(どく)を出す針(はり)を刺(さ)してクモを麻痺(まひ)させ、その体内に産卵(さんらん)します。巣(す)は石垣(いしがき)などのすき間(ま)を利用(りよう)します。



「玉虫の厨子」法隆寺に伝わる飛鳥時代の厨子。高さ 2.33m。国宝。宮殿形の厨子とそれを載(の)せる須弥座(しゅみざ)からできています。木製黒漆(うるし)塗りで、金銅透(す)かし彫りの金具で飾られ、その金具の下が、たくさんの玉虫(たまむし)のはねで飾られてあることから、この名がつけられています。

オオモンクロクモバチ



6月～8月、12～25mm。
習性(しゅうせい=くせのようなこと)は、ベッコウクモバチとほぼ同じです。巣は地中に作ります。ヤブカラシの花などにもよくきています。

セグロアシナガバチ



4月～10月、16～22mm。
中型のハチで普通によく見られます。家族で生活しますが、大きな集団にはなりません。巣は人家の軒下(のきした)や木の枝に作ります。巣をさわるなどの刺激(しげき)を与(あた)えない限り、人を刺(さ)すようなことはありません。

シオヤアブ(メス)



6月～9月、23～30mm。かなり大きく、恐ろしそうな姿(すがた)です。昆虫を捕えて、体液(たいえき)を吸い取ります。オスの尾の先には、白い毛がついています。人に被害(ひがい)を与えることはないようです。

アオスジアゲハ



5月～9月、32～45mm。大型のチョウで、たいへんすばやいです。幼虫はクスノキなどの葉を食べます。産卵(さんらん)のためか、クスノキなどの木の付近でよく見かけます。

ヒカゲチョウ



5月～9月、25～34mm。中型のチョウです。花にはきません。林の中のうす暗いところによく見かけます。幼虫はタケ・ササ類の葉を食べます。名前は日かげを好むので「ヒカゲ」とついています。このチョウが好きならすむ場所には、色を暗くしたようなクロヒカゲというチョウがいます。よく似ています。

ツクツクボウシ



8月～10月、中型のセミで、大きさはヒグラシと同じくらい。8月中ごろから鳴き出します。鳴き声は名前のとおり、「ツクツクホーシ・ツクツクホーシ」です。このセミの声が聞こえてくると、夏の終わりを感ずるようになります。



「チョウ」類についている名前のいわれ。アゲハチョウは花にとまって蜜を吸うときに、いそがしくはねをふるわせ、はねをあげている姿から、シジミチョウは、はねの形が小さくシジミ貝に似ているから、セセリチョウは、花の上で蜜を吸うときに、ゼンマイのような口を伸ばしてせせる(つついて食べる)から、といわれています。

◆晩夏…………… (ばんか=夏の終わりのころです)

夏の終わりが近づくと、ササキリ、ショウリヨウバッタ、トノサマバッタなどが現れます。

ササキリ



7月～11月、21～28mm。小型のキリギリス類です。鳴き声は「ジリジリジリ」という連続音です。〇〇ササキリと名がつくササキリのなかまは、ならやまの近くでも数種類います。



「群生相」とは、

トノサマバッタは、多くのなかまがいるところで育っていないものを孤独相(こどくそう)、多くのなかまの中で育ったものを群生相といいます。みんなが目にしてるのは、孤独相だそうです。

集団で餌(えさ)を求めて大移動するバッタが群生相です。孤独相のバッタは、緑色または褐色のまだら模様で、後ろ脚(あし)が長いです。群生相のものは濃い褐色のものが多く、はねが長く、後ろ脚が短いのが特徴です。

群生相になると、えさに飢(う)えた状態になり、攻撃的な性格になります。

ショウリヨウバッタ



8月～11月、オス40～50mm、メス75～80mm。オスは細くて小さく、メスは太くて大きいです。メスは日本のバッタ類の中で最大です。緑色型、褐色型、中間型もいます。草むらの中にいると保護色になるため、いることがわからなくなります。オスは飛ぶときに、「キチキチ」という音を出します。この音からオスは、キチキチバッタという別名もあります。

(上の写真はメス)

草むらにいる緑色型



枯れ草の上にいる褐色型



トノサマバッタ



7月～11月、オス35～40mm、メス45～65mm。殿様(とのさま)の名にふさわしい堂々としたバッタです。開けた場所を好み、背(せ)の低い草地にいます。飛ぶ力はバッタ類の中では一番です。このバッタが増えすぎると、群生相(ぐんせいそう)といって形や色のちがった姿になり、大群になって大移動(だいいどう)し、植物を食いつくしてしまいます。日本でも北海道で、作物に大きな被害が出たことがあります。

アフリカなどで大発生するバッタは、トノサマバッタに近い種類のバッタです。



「昆虫」とは

成虫の体が頭、胸、腹の3つの部分に分かれ、頭部に一対の触角(しよっかく)、胸部に三対のあし(6本脚)・二対のはねがある生き物の総称です。もちろん例外もありますが、分類学では節足(せつそく)動物門・昆虫綱(こう)に属する生き物をすべて昆虫と呼んでいます。

虫とは、昆虫はもちろんクモやムカデなど節足動物すべてを含めて虫と呼びます。